

## 平成29年度第2回四日市市総合教育会議

平成29年11月17日

午前10時30分 開会

### 1 開会

○館政策推進部長 時間になりましたので、始めさせていただきます。

いつもお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは、今年度、29年度の第2回ということになりますけれども、総合教育会議を開催させていただきます。

司会は私で進めさせていただきます。どうぞよろしく願いをいたします。

今回から教育委員の交代に伴いまして、豊田委員に新しくこの総合教育会議に出席いただいております。どうぞよろしく願いいたします。

○豊田教育委員 よろしく申し上げます。

○館政策推進部長 それでは、今日でございますが、お手元の事項書でございますように、大きく2つ、教職員の負担軽減のための方策、それから、四日市独自の教育プログラムの2項目となっております。どうぞよろしく申し上げます。

本会議は、公開ということになっておりますので、傍聴の方がいらっしゃるという状況でございます。どうぞよろしく願いいたします。

### 2 教職員負担軽減のための方策について

○館政策推進部長 それでは、早速内容に入っていきたいと思います。

事項書2番の教職員の負担軽減のための方策についてでございます。

前回の会議で、学校現場の報告ということで、小学校、中学校校長会の会長2人にお越しいただいて、現場の様子をお伺いしたかと思っております。その中で、教職員の負担軽減について取り組んでいくべきということで幅広くご議論をいただいたところでございます。その中で、具体的には、今日も議題にしております学校業務アシスタントの件、部活動指導員の配置、それからスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーの充実ができないか等々、さまざまなご意見を頂戴いたしましたので、今回は、具体的な負担軽減のための方策について何から着手できるかといった件、具体的に取り組めるところはどこからかといったことも含めて、議論していただきたいということでございます。

まず、本日は、資料に基づいて、この3項目について順に説明をいただきます。全体の説明、1項目めの説明を全部していただいた上で、学校アシスタント、部活動、それから校務システムの1つずつについてご意見を頂戴していきたいと思っております。

それでは資料の説明をお願いいたします。

○上浦教育監 教育監の上浦でございます。それでは、資料の説明をさせていただきます。

めくっていただきまして、まず、教員するなら四日市プロジェクト、子どもと先生の笑顔あふれる学校づくり（案）というのをごらんください。

これは前回の総合教育会議で出させていただいたペーパーとほとんど変わりございません。ただ、もうちょっと、目的だけを少し確認しておきたいんですけども、この教職員の負担軽減に向けた取り組みを推進することで、やはり教職員が子どもたちと向き合う時間を確保すると。あるいは、教材研究等の時間をきちんととって教育の質を上げていくと。要は、先生も子どもたちも元気になると。そして、子どもたちの成長につながっていくと、そういうことを目的として行っていきたいというふうなことでございます。

内容として、今から、さっき館部長も申し上げたように、3点ほど具体的な予算化に向けての取り組みを説明させていただきたいと思っております。

めくっていただきまして、1点目は、学校業務アシスタント、仮称でございますけれども、そういうのを導入したいというふうなことです。これにつきましては、今、学校で先生が、いわゆる教員でなくてもできるような仕事をたくさん受け持っているというふうなところで、教員ではなくても可能なそういう業務を何とか別の方にやっていただけないかというふうなこと。そこで教員の時間を生み出していきたいと、そういうふうなことでございます。そういう業務としては、今考えられるのは、例えば印刷、それから教材、教具等の準備や片づけ、学年等の会計、校内物品の管理と、こういうものが挙げられると思います。こういうことをやっていただく方を、学校に入れていくというふうなことで、負担軽減を図りたいというものでございます。

これについて、今後必要な取り組みということなんですけれども、これは大規模校、それから小規模校、このあたりによって業務が多少過密が違いますので、そういうことも含め、あるいは、先行の自治体が行っている例もございますので、そういうのを参考に、これは担うべき業務であるとか、そういう効果的な運用について検証を行って、本市の現状に即した事業構築を図っていきたいというふうなことを考えています。

2点目でございます。

めくっていただきまして、続いては、部活動協力員、これも仮称でございますが、これを、中学校でございますけれども、そこに配置をしていくというふうなものでございます。

これは、現状としては、放課後であるとか休日の部活指導、これが中学校の教員の長時間勤務の大きな原因となっているというふうなことで、あるいは部活動の競技経験のないものを持たせる場合があつて、そういうときは、時間もそうなんですけれども、専門的な指導が難しく非常に精神的な負担になっていると、こういうことも全国的にも言われていることでございます。

そういう教員の負担を軽減していくというふうな目的で入れるものでございますけれども、内容としては、いわゆる部活動協力員を配置するということで、その中身としては、放課後の部活動における、顧問が不在時の見守り・安全管理、あるいは顧問が作成する活動計画に沿った競技指導の補助、それから、顧問同伴での大会等への引率指導、こういうふうなことでございますが、今も外部指導員というの、学校に幾つか入ってもらっています。できれば、この勤務負担軽減ということでございますので、それにつなげるためには、こういう方々が単独指導で行うような、そういうふうな制度設計が必要かなというふうなことも思っています。

ですので、今後、取り組みとしては、担うべき業務の整理、それから、現行の外部指導員等の制度との整理。そういうことを行うことで、本市の現状に即した制度構築を図っていきたく、そんなことを考えております。

続きまして、3点目でございます。

3点目は、校務支援システムということでございますが、これは現状として、今、市内の小中学校でなかなかいろんなデータが効率よく活用されていない。例えば、それによって児童生徒名簿を1つ入れておけば、そこから引っ張り出していろんなものが作成できるとか、そういうふうなことがなかなかされていない学校もあるというふうなこと。それから、そういうことが若干なされている学校でも、学校によってフォーマットが違ふ、やり方が違ふというふうなことがあつて、教員は異動のたびに、そこへ行ったらそこなりのやり方を覚えて、それを活用していかなければいけないと、そういうふうな問題があります。あるいは、そこに何度も点検、確認が必要になってくるとか、データにふぐあいがあった場合の対応に時間がかかると書いてあるんですけども、これはつくっている者が、システムを構築している者が、ある程度パソコンに堪能な者がやっているんですけども、そこはなかなか、若干素人の域を出ない部分もございまして、例えば連絡票を印刷して

も、何かのぐあいでは1人ずつずれているとか、そんなこともありまして、そうなる、また余計に時間がかかるというふうなこともございます。ですので、この校務支援システムを入れていくということで、勤務軽減を図れるんじゃないかなというふうに思います。

施策の内容としては、市内で統一した校務支援システムを稼働させるというふうなことです。期待される効果としては、さっき言った裏返しなんですけれども、要はいろんなミスが防げるということ、それから、各学校で異動に伴う、そういう新たなその学校なりのシステムになれるんじゃないかと、行ったら前やっておったことが同じようにできるというふうなこと。それから、当然、事務時間の縮減というふうなことになってくるんじゃないかと思えます。

今後ですけれども、校務支援システム検討委員会を立ち上げて、必要な機能の選定、運用方法、それから帳票の様式など、実務に即したシステムの検討を進めるということになっているんですが、必要な機能の選定というのは、例えば、前から言われているのは保健業務、養護の先生がつくるいろんな表があるんですけど、それをつくったりとか整理したりするのにこういうシステムがあれば非常に便利だなということは大分言われています。

それから、先ほどの、今やっている教職員の負担、勤務時間の軽減の件で、勤務時間の客観的な把握をしていきなさいと。これは緊急提言にも出ておりますし、それから、今後そういうことをかなりきちんと言われてくると思います。ですので、この校務支援システムでそういうふうな機能を持たせることによって、勤務時間の客観的な把握ができると、そんなことも考えられますので、どういふものをこの校務支援システムに入れていくかということは今後検討していく必要があるかなというふうに思っております。

説明は以上です。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

それでは、3つございますので、1つずつ、少し議論を深めていきたいと思えます。

まず、学校業務アシスタントのところにつきまして、まず質問などでも結構でございますし、内容について、不明な点を話していただいても結構です。何かご意見がいただけたらと思えますが、まず、学校業務アシスタントの件につきまして、いかがでございましょうか。

○渡邊教育委員 さっきの説明の中で、規模によって異なるということ、普通は大規模校のほうが業務が多くて小規模校はそうじゃないようなふうに見える人が多いかもしれないけど、実はそうではない。学校訪問なんかをしますと、小規模校でもいろいろな事務というのは

同じようにしなきゃならないと。だから、小規模校で教員の少ないところで、大規模校と同じような書類はたくさんつくるといふことの負担といふのは、これは非常に大きいんだといふようなことを小規模校の先生から、私、話を聞いて、それはそうだと。だから、小規模校は非常に、クラスを持ち、さらにそれ以外の仕事を皆分担している、そういう分担が相当、少人数に負担がかかるわけですから、これもやっぱり目配りをしないとイケないので、ひとつその辺のところを誤解のないようにしてほしいなといふようなことですね。私は学校訪問で感じました。

○館政策推進部長 その点につきまして、大規模と小規模の違いといふことで何かありませんでしょうか。

○上浦教育監 今、渡邊委員がおっしゃっていただいたように、大規模でしたら、例えばほんとうに印刷量1つにしても、大規模校のほうがかなり多いだろうといふようなことを予想できるんですけども、ほんとうにおっしゃったように、小規模校では1人の先生がいろんな仕事を受け持っているといふふうな、そういう忙しさもございますので、そのあたり、業務アシスタントにどういふ仕事をしてもらおうかといふのは、当然、大規模と小規模は違ってくるんじゃないかといふふうに思いますので、ぜひ小規模にも、これは考えていかなあかん問題だとこちらも思っています。

○館政策推進部長 例えばアシスタントを導入しても、大規模と小規模ではおのずと担当していただく仕事が変わってくるかもしれないといふことですね。そういった点に気をつけなければいけないだろうといふことです。

ほか、ございますか。

○森市長 まず、教員するなら四日市プロジェクトというネーミングがいいなといふのはぜひ、まず最初に言わせてもらいたいなと思います。一体となってやっていくんだという意識のあらわれで、すごくうれしく思っています。学校業務アシスタントについてですが、教員でなくともできる業務のイメージといふことで、幾つか、印刷等の業務を書いてもらっていますが、その割合はどれぐらいなのかといふ実態調査も、今からやっていくといふことなんですかね。

○館政策推進部長 どうでしょう、実態的なところ。

○上浦教育監 これは、例えば先進的なところ、岡山なんかを見ますと、当然その効果について検証しているといふことがございます。ですので、これを入れた場合に、例えば、教員がどれぐらいの業務を頼みましたかとか、こんなのがありまして、例えば、4月とか



○葛西教育長 どうしても子どものためにという思いが強過ぎて、あれもこれもというふうなことになってしまいます。それで、今回は、この学校業務アシスタント、ただ単に人をつけるということではなくて、今、このことについて一番しっかり考えて、文科省にもアドバイスしているという、そういうふうな専任の人を、例えばこの研究の中に入れていって、実際にやりながら、そういう人の助言も受けながら、四日市としてはこうなんだという、そういうふうなスタイルを1年かけてつくっていきたいと。そして、それを全市に広げていくという、そういうふうな考え方でやっていきたいなというようなことを思っています。

ですから、やはり、大胆にやっていこうと思えば、やっぱりそのことについて私たちも仮説を立てながらやると。一方では、きちっと助言を受けて、そして、私たちもそれを試しながらやっていくというふうなことが大事だと思います。そういう意味で、市長が言われるように、これ、始めるまでにはきちっと、どういう業務でどういう時間なのか、そういうふうなことについてもきちっと考えたものを設定しながら来年度に向けていく必要があるかなというようなことを思います。

○豊田教育委員 先ほどの教育監のお話で気になったのが、前例でとられているときに、4月にはちょっとなかなか委譲ができないですけど、年度末になってきたらなれてきたで委譲ができるという仕事の、そういうスタンスだと標準化というふうにならないので、そもそもが、教員でなければいけない仕事ということのすみ分けができているという、それをした上で、だから、これは教員じゃなくてもいいので、アシスタントにお願いするとか、そちらへ委譲していくという、そこがやっぱりきちんと整理をされないと、この先生は言えるけど、この先生はなかなかちょっと気が弱くて頼めないとかというふうなふぐあいが生じてくるのはまずいかなと。

だから、アシスタントというのをちゃんと、何をする人と、逆に言えば、ほんとうに業務を切り分けて入れていかないと、結局過重な先生が残っていたりとかということも可能性としてはゼロではないと思うので、そこをちゃんと、やっぱり先生方の意識もそうですし、それから、アシスタントの教育ももちろん、受けていただいた方が入っていただきながら、機能していくととてもいいシステムだと思うので、ほんとうにシステムとして切り分けていけるぐらいのことをしないと、せっかくお金を投入しても動かないことになってしまうとまずいかなというふうな、形骸化しないような形での運用をお願いしたいなというふうに思います。

○館政策推進部長 きちんと仕事を分けた上で、ここは頼めるんだよということですね。

○豊田教育委員 それはその人の仕事なんだというぐらいのところに入れていかないと、例えばモデル校をつくったとしても、モデル校なのでできて、広げていくときにそのノウハウがきちんといかないと、それこそ、大規模校なら入ったけど小規模校は入らないとか、小規模校へ行ったらアシスタントの仕事は違うので何かみたいなことが起こり得ることを避けていただきたいかなというふうに思います。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

その辺もきちっとやらないといけないですね。

○加藤教育委員 市長も冒頭おっしゃられたように、私も、この子どもと先生の笑顔あふれる学校づくりというのがまずどんとあって、あるいはその目的のところにも、枠囲いで、今、1ページですけど、子どもと先生が明るく元気に向き合うことのできる笑顔あふれる学校づくり、これを我々も事務局もまず共有して、今回のいろんなプロジェクトについて、最後はそこに全部返ってくるような、収れんされるような議論にさせていただくと一番いいのかなと思いますね。

だから、今も少しアシスタントのこととかクラブの指導員の問題も出ましたけど、要は、子どもと先生が明るく元気に、明るく元気には、先生は先生の本来の仕事はきちっとやれるように、子どもたちに十分な指導ができるような時間を確保してあげるというふうなところで考えていかなあきませんし、かといって、今、教育監おっしゃられたように、事前にどれだけ個別、具体的に実態把握ができるかというのは、これ、なかなか大変だと思います。といいますのは、学校も、まず規模によって随分と業務は、今も出ていますように違いますし、あるいは子どもの、今、1年生から6年生、小学校であれば。あるいは中学校の1年から3年生までの子どもの状況というのも、これは毎年毎年いろんな集団が出ては入ってきますので、変わっていきます。あるいは、地域や保護者の方々の思考の傾向なり要求の傾向というのも、やっぱりこれは南と北では随分と違うのだと思います。だから、できる限りその学校の長である校長先生を軸として、ほんとうに自分の学校にとってどんな支援を受けたらありがたいのかというところをやっぱり、校長先生とももう少しじっくり膝をつき合わせて、それが実態調査の大前提でもありますし、返っていくところかなという気もいたします。

だから、私も今回、こういう案をいろいろ、しばらく前から見せてもらっていて、四日市独自の人的支援に関して言えば、やはりできる限り学校の裁量権を広げた、大きくした



人的配置であつたらいいなど。

具体的に言いますと、うちはやっぱりこういうタイプの支援が欲しいといたら、その人がきちっとこれはできるように。いや、やっぱり中学校の部活は、この3つの部活は今年指導者がいないので、ぜひぜひ外部の力をかりたいと、これによってかなり変わってくるというようなことで、じゃ、余ったその3人の部活の顧問は別のクラブにも回ってもらえますから、それで結果的には負担軽減ができますので、おそらく全国的には少ないとは思いますが、小中の校長先生が一定の予算をもって人を雇ってくるというシステムができたなら、これは画期的だと思いますし、初めは微々たるものであっても、それと、今も教育監おっしゃられたように、1学期はあまり必要ないけれども、2学期の行事の集中する時期にぜひこんな人的支援が欲しいというのも現状ではあると思う。だから、4月から3月まで通年でだーっと人が張りつくよりは、季節支援的に、やっぱり秋の実りの時期にくっと欲しいとか、あるいは、4月初め、5月初めの子どもが落ちつくまでにこんな支援をしたら先生がじっくり学級づくりをしてもらえるとか、そういうふうなフレキシブルに対応できる予算措置、これはまた、どういった予算でどういった枠組みで配置をすればいいかというのは、これは技術的な問題は当然事務方として生じてまいるでしょうけど、ほんとうに学校に欲しいのはそういう柔軟な支援。それをいっぱい、二、三年続けていけばかなり四日市の実態がわかってきますので、それからは何も、こちらから配置をすることもできるかもわかりませんが。

だから、学校教育課の人的な、学校教育課が配置するようなこういう人的支援じゃなくて、校長先生が主体になる人的支援ができればいいのかなと思っています。

**○館政策推進部長** 今おっしゃられたのはアシスタントに限らずという感覚ですね。

**○加藤教育委員** そう。部活の指導員も含めて。だから、100万なら100万の予算を、校長先生、考えます。それは、9月いっぱい全部100万使い切ってもよろしいし、あるいは、それを通年にちびちび10万ずつ使ってもらってもよろしいよと。それで、人も、地域の校長がやっぱり地域の人を知っていますので、地域のあの方にこの時期助けていただくという、人も含めて考えていくのもいいんじゃないかなと。これによって、かなり多忙というのと多忙感というのが随分とあって、現場にはその多忙な感じ、多忙感、こっちのほうが強い部分も多々ありますので、そこらを考えていただくと、これは全国的に先駆けて四日市はいい予算をつくってもらったなということに、私はなるんじゃないかなと思いますね。

以上です。

○松崎教育委員 あと、保護者の立場ということで、やはり加藤先生のおっしゃるものに近いんですけど、学校内が安心であって、情報漏れがないとか、そういった面での安心と安全さえクリアしていれば、やはりたくさんの人たちが学校に出入りして、風通しのいい、いろんな人の力がかかりられる学校であるということは、子どもにとっても親にとってもいい学校だなというふうに思うんですね。実際、子どもにとって何がいいかといったら、先生がとにかく自分を見てほしい、クラスを見てほしい、理解してくれていけば、ある程度時間的に何かほかにかかっていたりとか、ほかの人が担当していたりしても、それはクリアできる問題だと思うんですね。やはりいい授業もしてほしいという、その見てほしいことといい授業をしていってくれば子どもは満足できる。

そこさえ、先ほどの笑顔ということもありましたが、クリアできる問題だと思いますので、ほんとうにどんどんそういった風通しのいい学校づくりというか、先ほどのいろんな支援の方が入ったり、私から見ている、例えば給食などにもアシスタントというのが入るといいかなと思うんですね。小学校の給食で手のかかったりするお子さん、アレルギーの問題であちこちから聞いたこともあるんですが、そういった支援の方が入るのも今後いいかなとも思いますし、先生にとっても週に何度か、レスパイトというんですか、ちょっとした次の授業の準備をできる時間を確保できるようなアシスタントが、例えば給食とか掃除の時間に入るとか、地域の方のコミュニティスクールの力をかりて、何がしかもうちちょっと違う支援をどんどん入れていくことで、やはり学校がいいふうに回っていくんじゃないかと思いますので、どんどん、やはりこれは業務をきちっと、例えば、印刷は絶対アシスタントがやるものだと決めてかかっていたほうが今後いいんじゃないかなというふうに。先生がやるのはもう余分な仕事だよというふうに、見えるような形できちっと決めて。

○加藤教育委員 印刷屋さんとするわけですね。

○松崎教育委員 はい。どんどんそうやってやっていく時代じゃないかなというふうに思います。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

加藤先生のおっしゃられた、校長に自由度を与えるということと、最初に豊田委員が、今、松崎委員もおっしゃられたように、確実に先生の仕事を減らすためにはある程度業務を決めて、全校的にきちんと先生から手離れさせなければならぬところも必要だと思います。一方で、四日市市教育委員会として最初から、先生にやらさないように統一してや

らなければならないものもあるかと今ご議論をお聞きしていると思います。その両面でいえないといけない。

**○葛西教育長** そうですね。今、中教審で、学校における働き方改革特別部会というのをやっています、これが、業務の役割分担と適正化に関する具体的な論点ということで、5つの視点を挙げておるんです。1つは、基本的に教員のみが担える業務と、いわゆる学習指導、成績だとか生徒指導の部分だとか、そういうふうな部分と。教員が担う必要があるが、教員以外の者の参画により教員の業務を軽減できると。先ほど松崎委員が言われた給食指導なんかも本来教員がやるべき業務であると、だけれども、そこに1人それをサポートする方がいれば、その人がそういうアレルギーのものだとか、あるいは、非常に好き嫌いが多い子をどう食べさせていくのかとか、そういうふうなサポートができるという。

それから、ほかにふさわしい者がいる場合には、必ずしも教員が担う必要がない業務。例えばこれは、部活動なんかは、要はふさわしい人がいれば、何も教員が担う必要はないと、そんなふうと考えられると。あるいは、学校において教員以外の者が担う業務、これは、例えば給食のお金だとか、それか給食費を滞納したときに督促をする、そういうふうな仕事だとか、それから会計業務なんかも、これはそうなんでしょうね。

それから、また、学校以外が担う業務。学校は思い切ってそのことについては、連絡調整はするけれども、実際には入っていない。例えば文科省が挙げているのは、夜の補導の部分だとか、あるいは交通安全の見守り業務、このあたりは学校がするんじゃなくて、もちろん指導の部分はするんだけど、連携調整というような、そういうふうなことにしていってどうかというふうな、そういうふうな区分をしていると。当然、私たちも、このアシスタントをやっていく場合には、そういうことにもきちっと視点を持ちながらも、一方では、小規模校、大規模校のそういう違い、あるいは地域性、学校によって何を必要としているのかという、そういうふうなこともやっぱり加えて、総合的なところでさらに検討していく必要はあるのかなというような、そんなふうな思いはします。

**○館政策推進部長** 全体の皆さんのご意見としては、まず、一部を完全に切り離すなど、先生から手離れできる業務をきちんと確保する。先生が少し関与しなければならない、少し先生に手助けをしてもらわなければならないところは、学校によって違うかもわからない。例えば、先ほど見守りというお話がありましたけど、地区によっては、ものすごく見守り活動が盛んな地区もあれば、それほど盛んでない地区もあつたりしますから、学校に裁量を与えて、重点を置くところもあれば、重点を置かないところもあるかもしれない

ですね。

だから、まずは、最初市長もおっしゃられたように、きちんと切り離してできるところを一回事務的に出してみても、さらに、その微妙なグレーゾーンをもう少し議論しないといけないですね。

**○加藤教育委員** 行政の業務のように、毎年毎年同じような状況では、学校ってやっぱり生身の子どもがいますし、先生方も職員構成も変わっていきますので、毎年毎年変わっていきます。だから、そこにやっぱり柔軟に対応できるような、いつもいつも支援ができるシステムというのが、だから、渡邊委員が冒頭おっしゃられた校務支援ソフト、これはもう一般的にどこでもベースとして支援ができる部分ですので、これを導入いただくことによってかなりの部分はすっきりとされると思うんです。だから、それにプラスアルファ、学校のアシスト教員であるとか、部活の支援員であるような人的支援をどうつけていくかということについては、やはり柔軟な配置ができるような手だてを。

あるいは、印刷業務についても、学校教育課の予算というか、学校備品の予算が5台まで印刷機、大丈夫ですよというふうに基準を変えていただいたら、かなりの時間に輪転機があいていますから、それでどんどんどんできるということもありますし、それこそ支援ソフトができれば、そこである程度予約しておけばたっただ印刷もしてくれるというようなシステムも今の時代可能でしょうから、そういう校務支援ソフトの中で、印刷部分も大事にしたソフトをつくってもらうというのものもあるでしょうから、やはり総合的にぜひぜひ考えていっていただくと。

最後は、やっぱり、子どもと先生の笑顔あふれる学校、教育するなら四日市と、こういうところへ来ないと、我々、せつかくいろいろ議論しても。

**○館政策推進部長** 最終目的ということですね、ありがとうございます。

それでは、ほかのところにも議論が及んでいきましたので、次の部活動に行かさせていただきたいと思います。部活動協力員についてはいかがでしょう。何かご意見なりございますか。少し触れていただいたところもありましたけれども。

**○加藤教育委員** これとは直接関係ないんですけど、いいですか。

やはりこれは、私がかねがね議論で言っていることで、やっぱり中学校の部活については、一遍規模に応じて、ある程度部活の数を絞っていくという導入を1つやってもらうのも大事なことやと思いますね。従来から削るのが大変やと思いますけど、やっぱり小規模校も大規模校も大体同じようなクラブを全部設置してもらっていますので、当然、規模の

小さい学校は教職員定数が少ないですから、部活に対してやっぱり薄くなります。だから、やっぱり学校規模に応じて、大体この学校の規模は、クラブ数としては5から10ですよ、次の段階では10から15ですよというふうな大きなガイドラインを決めていただいて、そして、校長先生もきっと、来年度からAクラブをやめると、こういうようなことを言ったら、生徒からも保護者の方からもすごいケッチンを食らうことが予想されますが、そこは教育委員会がきちっとバックアップして、こういうふうにガイドラインが示されていますということで、数年かかってでもきちっと適正なクラブ数に変えていただくと。これについてもかなり教員の負担軽減の1つの方策としてはいけると思うんですね。

○館政策推進部長 その辺の議論は、今まで教育委員会でされたんですか。

○葛西教育長 ご意見をいただいておりますので、一定のことについては調査もしています。指導課長がそのあたり、担当ですので。

○廣瀬指導課長 大体学校規模によって、やっぱり持つクラブ数というのは限られてきますので、調査の結果だと、大体100人までの学校であると、男子で4.7、100から150人だと、男子では7、150から200であると8.8、200から250で9、250から300で11.4、300人を超えると13.7というような形で、大体比例的にですね……。

○加藤教育委員 クラブの数ですね、11.幾つって言われたの。

○廣瀬指導課長 そうです。部活は、大体学級によってそろわざるを得やんところがありますが、サイズダウンしていく、急激に子どもたちが減っていく学校においては、少し実態に合わないところもあるかと思いますが、そういう努力は学校では今しているところで。

○館政策推進部長 まず、ベースの数というのがあるわけですね。これはここで議論するのか、別途……。

○葛西教育長 これ、別途でいいです。

○館政策推進部長 教育委員会の中でまた議論いただくということですね。そういうベースがある中で、決められたある程度のクラブに対しての支援と、部活、先生への支援ですね。

○葛西教育長 これについては、学校の現状がこうであると。だけれども、子どもや保護者にとってみれば、やっぱり自分のやりたいスポーツをぜひしたいと。だから、そういう活動の場を市全体で、教育だけでなく、市全体でどう場所をつくっていくかという、そ

ういうスポーツの部分と連携しながら考えていかなきゃならないというふうなこともありますので、これはまた議論をしていきたいなと思います。

○森市長 部活動の指導員も積極的にやっていていただきたいと思うんですが、民間の指導員の方にどこまでの権限を持たせるかについては、いろいろ議論があると思います。これは賛否あるのを承知で話しますが、私はできる限り権限を持たせてほしいなと思うんですね。なぜかという、これも働き方改革の一環でやっているわけですから、いわゆる先生の範疇という、やっぱりグレーゾーンがたくさんあるわけで、できる限り線引きをして、エリアを狭めていかないと、結果として出るものも出てこないと思う。いろんな考え方があると思うんですけど、私自身はできる限り指導員の方が部活に専念してやってもらうほうが、結果として勤務時間の縮小に直接的につながっていくのかなと思います。クラブ活動がどういうものかという定義づけで大分変わってくるんですけど、中にはそういうふうにとっている自治体もあると聞いていますので、いろんな方のご意見を聞きながらですけど。

○館政策推進部長 その点は最初の資料説明の中でも、なるべく顧問が同伴しなくても行けるように単独で指導ができるように、遠征もそういうふうにはできるといいなという思いもありましたけれども、その点を少し議論しておいていただけると。

やはり、先生として、完全に任せられるような体制についてどうでしょう、何かご意見がありましたら。先ほどの仕事の切り分けにもよく似ているところだと思うんですけどね、市長がおっしゃるようにね。完全に指導員にきちんとお任せしていくということに対して、現場ではどんな感覚になるのでしょうか。

○森市長 他市町の事例があれば聞きたいんですけど。

○館政策推進部長 何かありますか。

○廣瀬指導課長 例えば神戸市は、そこの資料にございますとおり、顧問が不在時の見守り管理というような形で導入をしております。つまり、職員会議とか研修会議のときに誰も指導者がいなくて、事故を防止するということで、そういったときにも部活動を停止しなくていいように、いろんなクラブを巡回して見てくれるような指導員さんを配置しておるところもございます。あと、大きな、大阪とか東京のところでは、スポーツクラブと連携して、資格を持った指導員に専門的な指導をしていただくという。それで、職員に位置づけをするところはまだまだ多くはないんですけども、そういったところについては、引率もできるような体制では進めていく自治体もございます。

ただ、これ、中体連が学校部活動という形をとらないと参加できないので、そういう学校の部活動の指導者という形で預ける権限を持たせて、職員として位置づけないと、それはできないという形になっています。そういった、今、2つの種類で実施されている自治体がございます。

○葛西教育長 基本的には、部活動というのは学校の教育活動の枠の中にあると。そうした場合、やっぱり学校がきちっとこの部活動のいわゆる方針、部活動をどうするのか方針、そして、そこで培うものは何か、そして、それらの基本計画は何か、それらが、やっぱり学校が責任を持ってそういうものをつくっていかなくちゃならないだろうと、今の現在の法規の中では。その中で、いかに部活動を協力員の方に指導していただくか、あるいは教員の代替の業務をしていただくかという、そういうふうなことになると思いますね。ですから、かなりの業務をしていただいても、やはり顧問としっかりと連携、あるいは情報交換、これらをやっぱりしていただくと。だけれども、実質のところでは、この部活動の協力員の方にやっていただくというふうなところも徐々に増えてくるのではないかなと思うんですけれども。

○館政策推進部長 そこら辺が難しいところですね。教育の一環として捉えていくと、なかなか先生から手離れさせられないという、そこら辺ですよ。

○葛西教育長 ただ、実態としては、月曜から金曜の間で、それこそ顧問が毎日1時間、2時間ついて指導できるのかというと、ほとんど指導もできなく、子どもたちも自主的にやっているという実態が多いです。そうすると、土日の試合だとか大会だとか練習試合、それが顧問が一日、土曜日も日曜日もそこに行っているという、そういう実態なんですね。ですから、例えば土曜日、日曜日なんかを、うまくこれを使っていただけるような仕組みにしておけば、その分が、いわゆる教員が土曜日、日曜日どちらかきちっと休みがとれて、そこでまた、そのエネルギーを学校の本来の業務の教材研究だとか、そういうところに充てられるというふうな、そういうふうなプラス面は出てくるのかなというようなことを思いますし、平日も曜日を決めて入っていただくような仕組みにしておけば、教員がまた教材研究だとかほかの仕事にできるという、そういうふうなプラスは出てくるのかなと。そこと延長線上に、さらに、どう教員にかわり部活動の運営を行っていくかというふうな研究はやっぱりしていくというのが現実的な段階になるのかなというふうなことは思うんですけど。

○森市長 象徴的な取り組みになるので、無難に終わっていくと効果が出ないと思うんで

すよね。だから、ある程度思い切った判断もしてほしいと思います。

1人指導者が増えたというだけで終わると全く効果が出ない、別の効果はあるかもしれませんが、あくまでも多忙感の解消ですから、やはりそこは。

○**館政策推進部長** きちんと任せられるような、そういう仕組みができないかということですね。

○**加藤教育委員** 学校の業務としての軽減というところでおさめていかないと、クラブに期待するところは、私もベースでそういうクラブ数という問題もあると言いましたし、あるいは、教育長もちらっとおっしゃった、ほんとうに専門的なスポーツの基礎を培うような場であれば、やっぱり外部ということも出てきますので、やっぱり教育課程外ですけど、教育活動です。そこには、やっぱり学校のビジョンがそこにも反映されて、人づくりに役立つクラブの場ですので、そこにどう人的に、そして、先生の負担軽減にしていくかと。再三市長がおっしゃられる、働き方改革として、ほんとうに土日のクラブの、1人は必ずそういう方は入れるというのも1つでしょうし、土日のクラブは教員はノータッチ、外部でやりますというようなことだって可能ですから、そこまでやらないと、ちょっと助けてもらうというだけやったら、なかなかその費用対効果は見えにくいので、ほんとうにうちは、四日市は全部外部指導者でやっていますよと。

○**館政策推進部長** この前、休みの日を必ずつくるのをやりましたね。1日週休でしたっけ。

○**加藤教育委員** それも目当てじゃなくて、土日も外部指導者って決めたら自動的に先生は手があきますから、来たければ来てもいいでしょうけど。

○**森市長** なので、教育長、現場に応じて出てもらっていましたね。それを、受けていましたっけ。

○**葛西教育長** そうです。

○**森市長** やるなというのよね。

○**加藤教育委員** やるなというの、クラブでほんとうにまた元気をつけている教員もおりますので。

○**森市長** うまく外部指導員の方を活用していくと、やりながらそれが実現できるかもしれませんし。

○**加藤教育委員** だから、土日は、外部指導の方をお願いするというような1つの方向も検討する価値はありますね。



○館政策推進部長 ありがとうございます。

ほか、よろしいでしょうか。また何かありましたら後でいただくとして、もう一つの校務支援システムにも少しご意見いただけたらと思いますが。

○加藤教育委員 これはすごいことですよ。ぜひぜひお願いしたいと思いますね、これ。

よろしいですか。先ほども教育監の言葉の中にもありましたけど、教員って、やっぱりその学校その学校のやり方、事務処理の仕方というのが独自に今までありましたので、学校をかかわると、ほんとうに4月から目を回すような、前の学校と違うというような声はかなりこれ、多忙感の元凶に4月、5月はなりますので、こういうシステムができて、今までやっていたことと一緒に、四日市で新採でスタートしてずっと四日市におってもらえば、3年もすればどこへ行っても同じようなシステムで使えるということですので、これはすごいシステムだと思います。

また、そういうシステムも、やっぱり内容として盛り込んでいただいて、四日市の先生が、学校、子どもたちが元気あふれるためのソフトというふうな観点で新しい開発をしてもらおうと、これはほんとうにバラ色ですよ。

○渡邊教育委員 教員は、四日市ばかりで勤務しているわけじゃなくて、人事異動でかわりますよね。菰野に行ったり、いろいろと。だから、ほんとうは広域的にこの共通のシステムを入れるといいんですよ。だけど、これについては、おそらく自治体によって相当財政的にも差もありますから、一斉にはなかなかできないし、ましてや、県に主導的にやってくれと言っても、これも無理な話だろうというふうに思いますので、四日市でとにかくこれをいい成果を上げると、これによって確実に教員の負担が減るというようなことでスタートをさせるようにして、それをぜひ、これ、見習ってもらおうといいですよというように形で広げていくと、だんだんそれは、効果は浸透していくんだらうと思うんですよ。

○館政策推進部長 四日市発で県内にとという意味ですね。

○加藤教育委員 そういう意味で、初期投資を少しけちらずに、余力も残しながら、やっぱり四日市の独自のシステムをつくっていくんだという大もとの気持ちでスタートをしていただくと、今あるものを、A市のもの、B市のものをまねてちょこちょこつくって、はい、できましたよってなると、やっぱり将来の伸びも、渡邊委員おっしゃるように、これが全国標準に変わってくるぐらいの意気込みでつくっていただくと、四日市バージョンが三重県バージョンになって、全国バージョンになったら、これはすごいことです。

○渡邊教育委員 これも最初、データの入力が大変なんですよ。だから、やっぱりデータ

入力なんかについては、やはりこういう、いわゆるアシスタントを入れると、ITアシスタントみたいな、そういうものも一緒につけて、ハードだけじゃなくてそういうものもつけるということ、ちょっとぜひ予算の中に盛り込んでいただきたいと思います。

○**館政策推進部長** 例えばシステムができた後、1番目のアシスタント業務の中に1つそれを入れるという。

○**加藤教育委員** それを主たるものとするというのがありますよね。ある程度システムの状態もわかったか、あるいは、研修でそういうものもきちっと養って、この校務システムとアシスタントというのを一体にするというの、これは有効な活用ですね。

○**森市長** 業務が軽減されるというのもあるんですけど、もう一つ期待しているのは、生徒児童の一元管理ができるわけですよね。いろいろな情報がそのページを見ればわかる。学校を転校しても、データベースに情報があればそのまま引き継げるわけですよね。だから、そういうことを考えていると。データベースで情報管理をすると、教育委員会もダイレクトに見に行けて、統計やデータ分析なんかも早いし、いろんな切り口からできるようになると思うんですよね。子どもたちにとっても非常にいい情報が蓄えていけるなと思います。

○**松崎教育委員** 学年の引継ぎも含めて、それと、小学校から中学校もそのまま同じようなシステムでいけば非常に便利だと思います。

○**加藤教育委員** 学校が変わっても、タッチ1つで全部振り分けできるわけですから、その学校の名簿は瞬時にできてしまうわけですよね。

○**松崎教育委員** 今、1年生のときの先生に伝えたことが、4年生の先生は全然知らなかった、4年生についたときにはやっぱり情報がずっと続いていなかったということが多いので、それは画期的なシステムだと思います。

○**加藤教育委員** あとはどう管理するかだけですから。

○**館政策推進部長** 小から中への引継ぎですね。皆さんからは、いい意見だというお話ばかりいただいています。ただ、一回きちんとどういう構築をすべきか、時間をかけて、現場の声、ほんとうにやっていらっしゃる方の声で考えていかないと、システムができるからこうだろうという押しつけでは多分上手く行かないような気がしますよね。現場で使いやすいものにしていかないといけないということなので、それを入れてやらないと。

○**葛西教育長** 平成26年度にもこの検討委員会を立ち上げて、その中で教委の各課、小中学校の代表で中身について議論をしてきたと。そういうベースはあるわけですがけれども、

これについては、やはりここに書いてあるものをきちっと、どういう情報をどう管理していくのかと同時に、それらをどう子どもを成長させるために使っていくのかという、そんなふうな視点。そして、それらが結果的にこれだけ業務が軽減できるんだというふうな、そういうふうなことも含めてきちっと検討会議をして、専門的な立場の方にも入ってもらって、四日市のカスタマイズされたような、そんなふうなものを、やはり検討委員会をやっていかなきゃならないなというふうに思っております。

○加藤教育委員 このシステムとともに、人的なきちつとしたセットでやっぱりいくと生きますよね、明日から使えるわけですから。教員の場合は、やっぱりかなり差がありますので、得意な方と若干苦手な方と。だから、やっぱり各学校に定着させるには、それこそアシスタントの業務が、従来からある事務補助員というようなシステムを学校には、配置措置できている学校もあればできていない学校もありますので、そのあたりを整理しながら、システムをきちっと運用できるスタッフを各学校に置いてもらうというのも、これは確かにすごい人やな。

○館政策推進部長 どんどん学校に人が増えていく。

○加藤教育委員 アシスタントをやめてもいいんですよ。アシスタントの業務の一部としてそう考えてもらってもいいんですが。

○館政策推進部長 アシスタントが一部それを担うというのはあり得ますね、基本的に。

○加藤教育委員 それも必要ない学校もあれば、やっぱりほんとうに必要な学校もありますので。

○館政策推進部長 どうもありがとうございます。

大きく3点についてご議論いただきました。さまざまご意見を頂戴しましたので、これをベースにして、まず取り組めるところはどこかというあたりも、事務局とも相談しながら、来年度、再来年度の予算の組み立てにも生かしていきたいと思っております。

どうもありがとうございました。まず1点目につきましては、こういうことにさせていただきます。

### 3 四日市独自の教育プログラムについて

○館政策推進部長 それでは、大きい2点目でございます。四日市独自の教育プログラムについてということです。

これにつきましては、前回の会議で新しい学習指導要領に上がっている、プログラミン

グ教育について資料をといてご意見がございましたので、まず、そのプログラミング教育とは何かということの説明をしてもらった上で、今後どういったところにこの独自のプログラムをつくっていくかということ、教育監から説明していただきます。5ページ、6ページとございますが、6ページからまず説明してもらって、5ページを次に説明していただくということで、お願いいたします。それでは、お願いします。

○上浦教育監 それでは、まず6ページをごらんください。

これは、右にある、横になって、縦、ちょっとおかしくなっているので、それを左にまとめたという形でございますので、左のところで説明をさせていただきます。

プログラミング教育とはということで、子どもたちに、コンピューターに意図した処理を行うよう指示ができるという体験をさせながら、プログラミング的思考を育むと、こういうことになっているんですが、要は、プログラムを入れて、それで、自分の例えばロボットを動かすとか、そういう実践もあるんですけども、こんなプログラムを組んでいけばこうやって動く。そんなふうな処理をコンピューターにさせて、何かそういうものを動かせるとか、あるいは何か動作を実行させるとか、そんなふうな体験をさせながら、プログラミング的思考というものを育てていくと、そんなふうなことでございます。

ですので、これは、いろんな教科で、今までもこういう論理的な思考を積み重ねるということではできているんですけども、いろんな実践を見ていますと、このプログラミング体験のいいところは、実際に命令したとおりに動かない場合がありますよね。そうすると、どこか違っているんですよ。だから、そういうときに試行錯誤が生まれてくると。どうしたらこれ、ちゃんと動くんやろうな。ああ、ここが違っておったんやなとか、そういうふうなところで論理的な思考力が育っていくんだと。これが1つ、すぐれているところじゃないかなと私自身は思っています。ですので、動いたら正しくて、動かなかったら間違っているということがはっきりしてきますので、このあたりのところを体験しながら学んでいけるんじゃないかなと思います。

それから、ある実践の人なんか聞いていますと、これ、1人で、プログラマーって黙々とするというイメージがありまして、学校でもそういうふうな状況になるのかなと思っておいたら、実は違って、動かんだらみんなでどうするの、どうするのと、そういうふうな、いろんな仲間と考える姿が見られると。こういうふうなものがかなり多い事例として見られるというふうなものがありましたので、そういう中からでも、ともに学んでいくと、うちが目指しているようなことも期待できるんじゃないかなというふうなことも思い

ます。

それで、これ、実際、新学習指導要領に入れられて、どうしてもこれからの社会を生きていく上で欠かせないものであると、そんな認識があるんじゃないかと。生活により身近になってきていますので、この情報技術というものが。そういうふうなものを介在しながら論理的思考を育んでいくと、そういうふうなことになってくるんじゃないかなと思います。

それで、今、教育課程への位置づけと2番に書いてあるんですけども、小学校の場合は、そこに書いてある総合的な学習の時間であるとか理科とか算数とか、こういういろいろあるんですけども、中学校の場合は、技術・家庭でコンピューター、ICTを使いながらと、そんなことが多くなってくるんじゃないかなというふうに思います。

それで、実施する前提としては、さっき申し上げたように、各教科における思考力などの育成ということで、ほかの教科でもこういう論理的な思考を積み重ねている授業はありますので、このときだけじゃなくて、やっぱりいろんな教科を通じてそういうのを育んでいくと。そういう上で、こういうプログラム体験をさせると、これが大事なんじゃないかなということと、それから、ICT環境の整備と、こういうのがあれば、やっぱりこういうことはやりやすくなると、これが1つの前提になるんじゃないかなというふうなことも思います。

ちょっと簡単ですが、プログラミング教育と、そういう形で今提起をされているということで、それが少し次の、戻っていただきまして、新教育プログラムの策定の、少しかわってまいりますので、そちらに話を移したいと思うんですけども、この新教育プログラムにつきましては、四日市は教育大綱というのを策定していただいていますので、それに基づいて教育として取り組んでいかなければいけないんですけども、今、平成28年度に策定した四日市市学力向上アクションプランというのがございます。これが大綱の理念に基づいて具現化していくというプランがございますけれども、これを発展させる形というのが1つ大事じゃないかなというふうなことです。それに、新たに体力向上であるとか、あるいはいろんな課題も含んだもの、そういう総合的なものにしていったらどうかというふうな提案でございます。

それで、位置づけとしては、さっき申し上げたアクションプランからの拡充というふうに書いてあるんですけども、例えば、確かな学力定着のための授業改善というのがアクション1にあるんですけども、それがもう少し具体化して、今、学力調査においても、四日市

の子どもたちの状況を見ますと、数学がかなり全国的にも強みであると。非常に成績がよく、頑張っているという状況がございます。その中で、算数がもうちょっと定着してくれば、さらに伸びていくんじゃないかなと。だから、この算数・数学力の伸長と、こういう目指すというのが1つ入れていけるんじゃないかなというふうなことです。

それから、先ほどのアクション5にICT活用による学びの環境の革新とあるんですが、これは、先ほども説明させていただいたプログラミング教育につながるんじゃないかなというふうに思います。これを整備することによって、そういう論理的思考力の育成をもっと図っていくと、これをもっと顕著に打ち出すことができるんじゃないかなというふうなことです。

あるいは、英語教育。これは、もう今、大分進めているんですけども、今度小学校に英語が導入されるということで、これはかなり、他市に先んじていろんな取り組みをもう既に始めているところなんですけれども、これも本市の強みとしてこのプログラムの中に位置づけていったらどうかと、そんなふうなことでございます。ですので、学習力向上アクションプランを1つもとに、このプログラムに発展させていくと、こういうふうなところ。

それから、体力については、アクションプランの中にはございませんので、この辺も本市の課題となっていますので、このあたりの、特に小学生の体力向上を図ると。そして、みずから進んで運動やスポーツに親しむ資質や能力の伸長を図る必要があるということで、これもプログラムに入れてやっていったらどうかというふうなこと。

それから、先ほどから議題になっております多忙化への対応であるとか、これもいわゆる教育実践を進める上のベースというふうな、環境整備というふうな状況にもなりますので、そういうふうなことも含めたプログラムにしていったらどうかというふうなことでございます。

そのほかにも学習指導要領の改訂に向けた対応というのもございますので、そんなことも考えながら作成していったらどうかというふうな提案でございます。

以上です。

**○館政策推進部長** ありがとうございます。

まだ、事務局としての素案的なものでございますけど、いろいろとご自由にご意見を頂戴して、今後組み立てていきたいと思っておりますが、いかがでございましょう。どの部分でも結構でございます。この5ページのあたりですね。

○松崎教育委員 質問なんですけど、いまだにちょっとプログラミング教育がわからないんですけれども、これは、今までの小学校では総合的な学習の時間、中学校では技術・家庭科で実際にパソコンをさわっているいろんなことをやってきているわけなんですけど、それ以外の時間にもパソコンを、パソコン室に行って、理科や算数などの授業もそこでしてあって、さらに、パソコンを使いながらの、何かまた新しいプログラミング関係のことをすることで思考を養っていくということですか。時間もさらに増やしていくということですか。

○館政策推進部長 どうですか。

○川邊教育支援課長 教育支援課の川邊です。

時間が増えるということよりも、今までやっていた総合的な学習の中の一部分を捉えて、今までは総合的な学習の時間の中でも探究的な学習活動でやっていましたが、そこにコンピューターを使った授業を組み込んでいくというのも1つありますし、あと、今例示されているのであれば、5年生の算数の中で、多角形の描き方というのは、今までコンパスを使って描いていたんですが、それをコンピューターを使って、要はプログラムの思考をもとに描いていくということの学習をさせるという例示がございます。そういうふうに、今までやっていた既習の学習の中へパソコンを使った授業も取り込んでいくという形で、授業時間を増やすというよりも指導法を少し変更する、そういうふうに考えていただければいいかなというふうに思います。

○館政策推進部長 時間を増やすわけじゃないんですね。

○川邊教育支援課長 ただし、新たなことをやる部分は、今までやっていた時間を少し削って、この時間を生み出すというのは必要だというふうには思います。

○館政策推進部長 よろしいですか。

○松崎教育委員 はい。

○葛西教育長 パソコンを使う時間が増えるということ。

○森市長 算数・数学力の伸長というのがありましたけど、確かに学力テストを見ると、数学はすごくよくて、算数はそこそこ。その背景は何かわかっているんですか。

○館政策推進部長 その理由ですか。

○森市長 理由というか。

○廣瀬指導課長 やっぱり小学校の2年生後半の九九とか、3、4年生のところの少数とか分数とか、そういう積み上げのところをつまづきが多分出てきているんじゃないかと。そのところをスムーズに流していかないと、5、6年生、中学校につなぐというところ

は難しいので、そのあたり、何とか手が入らないかなというので考えていきたいと考えています。

○森市長 今年だけじゃなくて、毎年そんな傾向でしたっけ、四日市は。

○廣瀬指導課長 全体的にそういった傾向があるということは、分析の結果、だんだんわかってきました。

○森市長 中学校になると良いというのは、小学校の先生にもっと頑張ってもらわなければという話になってくるんですけど、そういうものでもないんでしょう。どうなんですかね。

○葛西教育長 全体的な傾向としては、四日市の場合は、小学生は元気で毎日学校へ行って楽しいという、そういう考え方が保護者の方に多く共通して見られるというのが起点にあるのかなというふうなことを思います。

ところが、中学校へ行けば、当然、小学校からもキャリア教育を積んで、将来どういう仕事につきたいのか、あるいはどんな人間になりたいのかという、そういうキャリア教育も積んでいきますし、現実には高校選択という、そういう問題も出てきます。そうした場合は、やっぱり北勢のいろんな高校があるという、そういう状況の中で子どもたちは努力して目標を達成していきたいという、そういう気持ちも強いですから、だから、やっぱり中学校については伸びるんだろうなというふうな、そんなふうな思いでおります。

○松崎教育委員 かなりギャップがあるんですね。

○森市長 向上力が出てくると。

○松崎教育委員 小学校の間は別に勉強しなくてもそこそこ楽しくという。

○森市長 人間力を養ってくれればいい。

○松崎教育委員 そうですね。いきなり中学になると、部活はしないといけない、勉強はしないといけないということで、かなりハードになって、精神的にも追い詰められて、不登校とかそっちということもあり得るということですね。

○森市長 話は変わりますが、英語に力を入れていくということですけど、来年度、全国小学校英語活動実践研究大会が四日市市で開催されるんですね。こういったものも契機になると思っておりますし、あと、勉強以外でも、やっぱり体力ですね。私は、子どもにみんな元気になって、元気もりもりでいてほしいなという思いがありますが、この体力がやっぱり全国平均より低いんですね。小中ともに低いんですね。

○葛西教育長 いえいえ、中学校は、女子は、これは全国よりも上です。



○森市長 女子は高い。

○葛西教育長 男子が上になったり、少し下になったり、全国レベルということになります。小学生が、男子が全国よりも少し低い、女子はそれより少し低い。ただ、小学校の場合もこの数年で、右肩上がりですっかり伸びてきています。それはそうなんですよね。

でも、今ここで、ひとつこの体力を、四日市、さらにつけていきたいという、そういう思いを強く持っておりますので、ぜひこの教育プログラムの中に位置づけて、全ての小学校、中学校で、それこそ目的を持って運動をしていくと。特に体育の場合には、運動することが習慣づけて、そして、生涯スポーツ、生涯にわたってスポーツをしていくという、そういうふうな観点からも考えてやっていかなきゃならないかなというようなことを思っています。

○森市長 項目でいうと、走る、投げる、跳ぶが弱いという。全部ではないのかと思いますけど、やっぱり絶対的な運動量が不足しているんですよね。だから、絶対的な運動量を増やすような試みを、小学校のときももっともっとすべきだと思います。

体力は学力と違って出し惜しみする必要ないですから。

○葛西教育長 その辺、指導課長、どう？

○廣瀬指導課長 中学校は、学力調査の結果にもあるとおり、部活動の参加率が全国に比べて高いところがあって、これが体力の向上にも役立っているというのはよくわかります。

小学校がなぜ低いのかというところで、特に走る、跳ぶ、投げるという運動の基本のところは弱い、これはもうちょっとさかのぼって、多分、これは推測ですけど、幼児期とか小学校低学年に外遊びが決定的に今の子どもは少なくなってきた。そこから自然に培われてこないの、やっぱり狙ってつけてやらないと動ける体ができない。動ける体ができないと、運動して遊んでも楽しくないので運動しなくなるの悪いスパイラルに入っている子どもが多いのではないかと推測されます。

そこで、例えば走る、投げる、跳ぶを狙って指導して行って、一定、算数でいったら公式を覚えるみたいなどころをつけてやらないと、なかなか思い切って運動を楽しめる体になれないのではないかと考えますので、そういったところをぜひ、スムーズに動く体づくりのもとをつくっていきたくて考えています。

あと、決定的に体幹という、上体起こしも腹筋も弱いんですけど、ここも体幹がつかないと走れない、跳べない、投げれないので、こういったところも遊びの中でカバーできるようなことを例示してやらないと、小学校は体育の先生の専門が学校にいるとは限りませ

るので、そのあたりをしっかりと示して、各学校で取り組んでいただけるような準備をしたいと考えております。

○森市長 各学校で、体育はもちろんですけど、例えば業間マラソンとか、縄跳びとかしているじゃないですか。ああいうのももっとしっかりとやってもらおうというのも1つはありますよね。量として増やしていくという。

○廣瀬指導課長 その辺、先進的な取り組みをされている学校もございますし、この間も県教委が訪問して見ていってくれたんですけど、業間の20分をどう子どもたちに遊ばすかという、そういう取り組みも周知して、広げていきたいとは思っております。

ただ、いろんなことをうちも要求していますので、読書はせい、基礎学力を高めよ、体力を高めよっていっぱい言っていますので、その英語もモジュールをどうするかとかいう、そのバランスは上手にとっていただくように、カリキュラムマネジメントという今度の新しい考え方を何とかうまく全校で取り組めるようにはしていきたいと思っています。

○森市長 できれば体力測定も、小学校5年生と2年生で全国一律やっているわけですけど、例えば四日市はもっと小刻みに体力を測定していきながら成長を追いかけていくとか、数字でしっかりと上げていくというのをやってほしいですね。

○渡邊教育委員 見える化するとですね。

○森市長 そう。見える化。感覚でなく、やっていただきたいなというのがありますね。

○館政策推進部長 幼児とか低学年で、基本的な外へ遊びに行く、外で遊ぶという、習慣づけをしないといけないかもしれませんね。

○松崎教育委員 となると、前から私も、いろいろ話題にもなっているんですけど、やっぱり幼稚園、保育園との連携をしていかないと、小学校になっていきなり得意になったり好きになるということは意外に難しいと。小学校の運動会を、1年生の走っている姿を見るとすぐわかるんですけど、できる子とできない子が確実に差がついていますので、それ以前のところでかなりこれはバックアップしていかないと、1年生から、特に女の子もそうなんですけれども、やらない子は徹底的にやらないですし、中学に入っても部活動は文化部に入りますし、そのあたりを、せめて好きになれるように、ちょっと何か手だてとして幼稚園と保育園と。

○加藤教育委員 やっぱりはいはいから違うんでしょう。

○豊田教育委員 確かに運動はさせなきゃいけないので、生活の中に取り込んで、普通に動いていることが当たり前になってこないと、今から運動やりますとか、今から何々やり

ますって、それは短期ではできますけど、習慣化するの是非常に厳しいので、先ほど外遊びが減ってきているんじゃないかなって、多分ゲームの関係かなって思ったりとか、あるいは環境があんまり芳しくないの、危ないの、変な人がいたりとか、そういうので遊びをさせないとかというようなことも含めて、もう少し広いところでの調整も必要かもわからないですし、やっぱりほんとうに生活の、自分のご家庭の中も含めての、ちょっとした動きの中に入れていくことが習慣化していったりとかという、1つになるのではないかなというふうには強化するのは。

それで、ちょっと私、お伺いしたかったのが、最近、小学生は少しずつ右肩上がりではなっているという、ここは何か仕掛けがあったんですかね。

○**廣瀬指導課長** これは、体力調査を毎年やっていかなければならないところで、そういったことについて関心も高まってきているという、ここは学校の指導によって少しずつ、ターゲットを絞って改善されてきたというところがございます。

○**豊田教育委員** ありがとうございます。

○**森市長** 日常的に運動するというのは非常に大事で、例えば私は水沢ですけども、1時間かけて歩いてくる子どもはすごく足が速いんですよ。僕は、家が近いので、あんまり足が速くはないですけど、やっぱり毎日の通学とか、日常的な運動は大事だと思うので、何か無理にでもさせないといけないと思います。

○**豊田教育委員** それこそ、どこかへ遊びに行ったときにも、親御さんも階段を使って子どもと一緒に上がるという、大人の体力づくりにもなるんですけど、親御さんがすぐエレベーターに乗ったり、エスカレーターに乗っちゃうと、子どももそのように乗っちゃうので、離れることは危ないので、ちょっとしたそういうことかなというふうに。

○**松崎教育委員** 生まれたときからの親の感覚的なものですよ。

○**豊田教育委員** そうですね。どんどん世の中、便利になっているので、体を動かさなくてもできるようなことが増えちゃっているんで、そこが1つ。

○**松崎教育委員** せめて1年間通して、今まで季節的に縄跳びは冬とか、マラソンも冬だけとかということをして、1年で何とか計画的にずーっと続けるようにしてほしいなど、学校で。

○**豊田教育委員** 夏にすごい暑いのにハードなこともできないけれども、冬はマラソンだったら春は何かみたいな、少し目先のことも変えると子どもたちも楽しんで、ずーっと、マラソン嫌いなのに、年中されているとかなわんなどかということもあったりするので。

○松崎教育委員 私たち、小さいときは、外に跳び箱が放課後でも置いてあったりして、子どもたちが暗くなるまでやっていたりするんですけど、今は責任問題もあって、跳び箱やら縄跳びの台もしまわれてしまうというのがありますので、そのあたりもこれから出して、ずっと子どもたちが外で遊べるような環境づくりというか、何かまた支援の人たちの手をかりるなりして。

○豊田教育委員 その辺、ちょっとアシストが入ってくださるとあれですよ。

○館政策推進部長 今、運動場って、放課後はあんまり使えないんですけど。実態はどうなっていますか。

○廣瀬指導課長 自由に開放して遊ばせているところはほとんどありません。家へ帰ってから遊びに来るといふ、そういう形になっています。

○葛西教育長 今は社会体育で、それこそサッカー、あるいは野球ということで、ほぼ1週間、放課後はそういうのが主体として使われています。

これは、学校は学校で、当然、継続的にやっていく必要はありますけれども、やっぱりこれは市を挙げて、今、第3次のスポーツ推進基本計画の中で、スポーツで元気になるまち四日市ということ、これを大きな目標に挙げて、今後、高校総体、それから国体も、そういう大きなイベントもあるんですけども、同時に市民スポーツ、地域スポーツ、その中でやっぱり市民がスポーツを楽しんでいくということを広げていくと。その中で、子どもも一緒になってお父さん、お母さん、あるいは地域の人とスポーツをしていくというふうな、そういうふうな基盤みたいなものをしっかり同時につくっていくという、そういうふうなことも必要なのかなというようなことも思います。

特に三重地区なんかは、総合型スポーツクラブがあって、総合型スポーツクラブが学校にも入っていただいて、いろいろ一緒にしていただいているという、そういうふうな取り組みもありますので、そういうこともやっぱり考えていく必要があるんだろうなと思っています。

○加藤教育委員 ちょっと視点が変わるんですけど、これ、こういう総合教育会議の場で新教育プログラムをつくっていくということになっていますので、方向としては、今提案いただいております5ページの表を見ますと、アクションの6つの中で3つは拡充という部分が出てきて、あとの3つについては、今のところ特になしということになっていますが、これ、どうですかね。新しいプログラムをつくっていくこの時点で、いわゆる従来の学力向上アクションプランの拡充と、もう一つは、より具体化といいますか、拡充具体で、例

例えばこの6つのものについてより具体的に表記、目標を掲げていくと、これが1つ、作業として今後の方向としてあって、さらに、やっぱり学力向上のベースである体力向上という意味合いから新たにこれを付加するということでアクション7になるのか、ベースとしての6つのベースとして体力向上というのをもう少し大事にして、今後の新しいプログラムをつくっていくということでまとめていくのがうまくいくのかなという気がします。

その場合に、例えば今日例示で示してもらってあります拡充の3つの内容を見ますと、中学校の教員にとっては、算数、これも数学科の教員、頑張れな、英語、これは英語科の教員、頑張れなど。家庭科の先生や音楽の先生は、俺はもう関係ないわというのが多分実態になると思う。だから、言葉は知っていても実践に結びつかないとなりますので、そこからはもう少し、中学校の教職員もやっぱり1つになって取り組めるような大きな柱を1つ出していただきたい。要望ですけど。

例えば、アクション3の地域資源の活用という部分で、中学校がもっと重点的に四日市を知ろうという取り組みを増やしていただくのも1つかもしれません。

あるいは、アクション5のいわゆるプログラミング教育の部分で、さらに各教科、論理的な思考を重視するような単元構成をせいというふうなやり方もあろうかと思えます。

あるいは、空調はなかなか、具体はないので、つけてもらえばそれでいくんですが、そんなところで、やっぱり今回新しい教育プログラムの策定に関しては、拡充具体というところできちっと6つのアクションを表現し直してもらい、新たな目標を設定していくと、その中でも重点というやつを。

それで、体力向上については、新規にやっていくと。だから、これも、小学校も中学校も市内共通して取り組んでもらうこと。今、市長がおっしゃる、測定は2年と6年でなしに、毎年毎年やっていくと。特に、このごろソフトボールを投げるとか、あんな運動ってなくなっているんですね、学校で。我々の時代といたら、放課後の遊びはソフトって男の子は決まっておったと思うんですが、あれがないと。だから、やっぱり6年間、テストであっても投げ続けたら絶対にソフト投げは向上すると思うんですよね。だから、受け方の違いもあります、この測定の。テストを受ける技術で随分と変わってもきますので、それによって結果的には体力向上が図られますから、やっぱり投げる、跳ぶ、走るという基本の運動について、毎年テストがあるよと言え、やっぱり日ごろから、ちょっと走るのが遅い子はやっぱり今度1秒縮めたいと思って、放課後どこかで走ってくれるだろうし、投げようと思ったら一遍お父さんを連れてきてキャッチボールしてという子も出てくるか

もしもありませんので、そういうことでテストを習慣化することによって体力向上を図るとい  
うのも1つの手段ですから、そんなことをしながら、いよいよこの新教育プログラムをつ  
くっていくときには、拡充具体をしっかりと一遍練っていこうと、今後。それと、体力向上  
についても、もう少し具体策を出していくということで、プログラムをつくってもらった  
ら現場も混乱せずに、そして、従来のアクションプランも十分踏まえながら、さらなる進  
展が期待できるのかなと思いましたが、方向ということでちょっとお話をさせていただきました  
けど。

○館政策推進部長 もう少しバランスというのか、学校全体で取り組めるようなものが必  
要だということですね。ありがとうございました。

○加藤教育委員 そういう方向で市長、どうですかね。

○森市長 確かに、四日市の地域資源の教育への活用などは、今もやってもらっているん  
でしょうけれども、もっと特色をつけていくという意味で。共通意識を持ってということ  
で、拡充として新しいものを加えていくというのは。

○加藤教育委員 ここで具体的に四日市ということで、算数、数学というのも四日市の1つ  
の特徴にしていこうということで、ここで特出しを、アクション1にしてもらっています  
ので、あと、アクション2からについても何か四日市の特出しを、キーワードを置いてい  
ってもらおうというふうにするとかかなり新しいものが。で、よしやろうと。特に中学校はそ  
うしてください。算数と英語の教員だけがおまえら頑張れって言われそうなので、そう  
なってしまうそうです。

○森市長 皆さんが共有できる目標があればいいということですね。

あと、先ほど松崎さんが少しおっしゃったんですけど、私が気になっているのが、不登  
校なんです。不登校の数字が全国、県よりも高いという状況があって、何とかならない  
かなという思いがあるんですよ。カリキュラム的要素が強いのですが、こういった新し  
いプログラムは重点的にやっっていこうというところなので、その辺にも軸足を置いてい  
ってもいいんじゃないかと思います。

○松崎教育委員 アクション1の学力定着の授業改善というか、やはり不登校の中では成  
績がいま一つで中学へ入っていったりとか、小学校高学年で自分の学力に自信がなくな  
って不登校という子も随分いるって聞きますので、そのあたりの下支えするようなシステ  
ムをもうちょっと、確かな学力定着のアクション1で数学・算数力に関しても何かできると  
いいかなと思うんですけど、今、地域でやったださっているところもありますので、

それをもう少し公の力で何とかならないかなと思うんですが。

○加藤教育委員 学校アシストで、補修講座にも先生を雇ってくるというのがありますよね。アシスト、放課後教室を学校でやると。

○館政策推進部長 授業についていけないから不登校になるというのを避けるという意味ですね。

○葛西教育長 ですから、そういう意味で、算数に今回の場合は絞って、特に中学年、3年生、4年生ぐらいで算数がわからなくなってくると、非常に抽象的な思考も入ってきますのでね。そここのころをやはり、きちっと基礎、四則の計算をきちっとできるだとか、あるいは、割合につながっていくような割り算だとか、それから商の考え方だとか、そういうところをやっぱりきっちり子どもに身につけさせていくというのも不登校を防いでいく1つの方法だろうなと思いますし。

○豊田教育委員 人間関係とかはどうなんですか、その不登校の要素の中に。

○松崎教育委員 コミュニケーション力が弱くなっているというのがありますよね。

○葛西教育長 そのあたりはどうですか。コミュニケーション力。

○廣瀬指導課長 これははっきりとデータでとっていないんですけど、感覚として、コミュニケーションに問題を抱えるお子さんには、少し発達に関する課題もかいま見られるところがありまして、その個別対応というところが必要になってきている。そこは、教育支援課でもかなり、通級教室等も開いていただきながらカバーしていく。ただ、これ、1対1の対応になっていきますのでなかなか難しいところもございますが、中にはソーシャルスキルトレーニングを学級の中でやって、人との接し方をトレーニングしているというところもだんだん増えつつはございます。

あと、なかなか家庭で人と触れ合うというか、要はネグレクトとか虐待の家庭については、愛着形成も十分でなかったりするところから、なかなか人とかかわることが難しい、そういったお子さんがかいま見られますので、そのあたりの家庭支援というの、違ったところからもアプローチしていかないといけないかなと感じています。

○館政策推進部長 そっちの面もあるんですね。いろんな原因があるものの、とにかく市長の思いとしては、不登校率の数字が四日市市として高いと。

○森市長 不登校率が高いというのがやっぱり気になっています。

○館政策推進部長 そこを1つ今回の中に入れていってはどうかと。

○森市長 やっぱり数字で出るものに対しては、改善していく義務はあると思うんですよ

ね。

○館政策推進部長 そこも少し取り組みの中の項目として、この中に入れていきたいということですね。

○松崎教育委員 ある程度の子の数学をより上げるというよりは、数学の苦手な子たちの数学をもう少しこれからバックアップしていくということですね。両方、全体的にということですか。

○葛西教育長 特に、施策としてお金を入れてやっていく、市としてやっていくというのは、今考えているのは、やはりきちっと基礎学力がついていないお子さん、このお子さんに対して、ちゃんと市は学力をつけて、これから上学年に進んでもたじろがないような、そういうふうな気持ちをやっぱりつけていくということはまず大事だと思います。

それから、トップレベルの子どもたちについても、授業の中で、1つの单元の中で、やはり一定基礎的なことを学習した後、そのコース別によって非常に難しい課題を挑戦するグループというふうな、そういうふうな手だては今とりつつありますので、そういうことをさらに充実することによって、子どもたちがさらに難しい課題に挑戦していくという授業形態にやっぱりしていかなきゃならないなというようなことを思っています。

○館政策推進部長 両面ですね。

○葛西教育長 授業の中では当然両面やるんですけども、市の施策として手を打つべきなのは、やはり基礎のところをしっかりと、どの子にもきちっとした学力をというふうなことかなと思っています。

○豊田教育委員 前回のデータの中で、基礎学力がまあまあついている子どもたちは学校が楽しいというデータが出ていましたけど、裏返せば、ついていない子は楽しくないということなんですね、データって読み方なので。なので、そこをやっぱり公の力で上げていって、楽しいって思って、まず学校へ行けるその数字、できる子は楽しいって、基礎学力はだから大事だという読み方をすれば、そこがついていない子は楽しくないのでというふうに思うので、ぜひ。

○館政策推進部長 そうですね。学校へ、それが不登校につながらないようにということですね。

○加藤教育委員 わかる喜びとか、わかった喜びとか、すごい力を持っていますからね。だから、そこやわ、やっぱり。

○豊田教育委員 その体験をいつさせるかに、ちょっとしたきっかけであることが多いの



で。

○加藤教育委員 やっぱり笑顔のある学校づくりです。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

なかなか議論は尽きないんですけども、時間が参りました。こちらのプログラムについては、今後も何度か議論させていただきながら進めていきたいと思っております。

それから、1点目に議論いたしました多忙感というか、負担軽減は、今日いただいたご意見を参考にさせていただきながら、教育委員会と市長部局とで議論して、何かからできるか、具体的などころを詰めていきたいと思っております。

今日は2点につきまして議論をしていただきました。ありがとうございました。

#### 4 その他

○館政策推進部長 その他の点で何かございませんか。市長、お願いいたします。

○森市長 ご報告というところなんですけれども、皆様方には教育委員会会議の場でご報告済みではあるんですけれども、さきの8月の議員説明会において、新しい部、仮称なんですけれども、スポーツ・国体推進部の設置について説明をさせていただいたところです。

そして、11月末から始まります11月定例会議会におきまして、新しい部の設置について、要はスポーツに関する権限を教育委員会から市長部局に移管しなければいけないということで、教育に関する事務の職務権限の特例に関する条例案を提出させていただきたいと思っておりますので、ご報告をさせていただきます。

○館政策推進部長 どうもありがとうございました。

この11月議会でいろいろと議論いただくことになると思います。

その他、ございませんでしょうか。よろしいですか。

では、長時間にわたりましてありがとうございました。今度は年度末までにもう一回ぐらいやらせていただいて、特にこの新教育プログラムについては、さらにもう少し具体的にご議論いただきたいと思いますと思っております。

それでは、本日はどうもありがとうございました。

午後 0時 2分 閉会